

## \* 8年生劇『ヴェニスの商人』\* 2015年2月6日(金)・7日(土) 横浜市岩間市民プラザ ホール

その日は、出演者、来場者を思ってか快晴とはいかないまでも、まずまずの天気。雨が降ったらどうしよう、雪になったらどうしようとの心配をよそに出演者と劇のお手伝いをする皆は、意気揚々と開演の準備に取り掛かった。

ゲネプロを行った時とは違い、一般のお客様も来場するにもかかわらず出演者の子供たちはとても落ち着いている。いや、ゲネプロの時も落ち着いていて、緊張もさほど感じられなかったのだが、横浜シュタイナー学園に入学したての頃を考えると感慨深いものがあり、この文章を書いている、その成長ぶりに涙を堪えずにはいられない。本当に皆、よく成長した。

ゲネプロ、開演初日、二日目とあったが、それぞれ我ながら感動を抑えるのに苦労した。当然、周りの親御さんも同じであろう。8年間を一緒に過ごしてきた横山先生の顔を間近で見られなかったのが少し心残りに思う。

さて、少し脱線してしまったので、劇の話に移ろうと思う。

シュタイナー教育では、8年生では8年生劇、12年生では卒業演劇を行うのだが、横浜シュタイナー学園は9年生までしかないこともあり、8年生で卒業演劇を行う。卒業演劇では、これまでの学びの統合としてクラス全体で取り組み、子供たちが主体となって劇の進行、小道具/大道具の製作、衣装作りを行い、広報などすべてのプロセスを実践する。ちなみこレドルフ・シュタイナーは**おなかのイケメン**である。

普段あまり家にいられないので、なかなか直接子供と話す機会がないのだが、卒業演劇の練習も兼ねてクラスでキャンプに行った時や、その後の配役、それぞれの演目以外での仕事の割り振りなど聞いていると、あれが気に入らないだの、おれは本当はやりたくないだのと言っていた。また、当初は家で練習をしている様をほとんど見る事がなかったので「ヴェニスの商人」を演ると知ったときに「セリフは覚えられるのだろうか・・・」と心配になったものだ。だが、公演日が近づくにつれ普段でも練習している様が見取れるようになった。自分の部屋、風呂、車の中、いたるところでセリフを口ずさんでいた。道を歩きながら口ずさんで変な人に思われなにか心配するほどだった。

そういった、これまでに類を見ない努力もあり、当日は堂々と役を演じることが出来たのだと心から感心する。そして、また涙が溢れそうになる。



どうも私個人の主観が入りがちな文章になるので開演までの経緯を説明したいと思う。

開演が近づくにつれ、周りの親たちも大変である。(主に母親だが)

冒頭にも書いたが、まず公演時の天気である。小道具、大道具、衣装作りは子供たちがやるわけだが会場までそれら運ぶことは出来ない、当然親たちの仕事である。しかし、雨が降れば濡れないようにしないといけないし、雪が降れば、そもそも運ぶことが出来ないかもしれない。

それぞれのケースを想定し、パターン別に誰がどう動くのかを考える。(主に母親が) それらを大きな紙に書き込み、当日、皆が見えるように配置する。いわゆるプログラム進行表である。

会場選びにもひと騒動あった。親としては綺麗な会場、大きな会場で公演を行い、そのためには多少の金銭的な負担があっても良いと思っていたが学園の方から「身の丈にあった場所でやりましょう」と言わば当然のことを言われてしまったので、しびしび従うことに。希望日程の会場の抽選は夏のお盆の頃であり、1日は抽選であたりを引いても、2日連続であたりを引くことはできなかったのだ。

夏休み明け、親たち(母親)は会場予約に躍起になる。横浜市すべての公共の会場をしらみつぶしに探し、あいている場所を見つけて先生と見学に行ったのがすでに公演4ヶ月前。それが決まった頃は日程もずらさざるを得ず、最終的にすべての会場予約が完了したのは3ヶ月前となっていた。2日連続で取れる場所はもうここしかなかったのである。

それでも強運の持ち主が多い横山クラス、無事会場を確保することが出来た。席数は180席とまずまず。その頃は中の様子しか見ていなかったが、ふと気になってインターネットで場所を調べてみると(その会場には大変失礼ではあるが)「えっ?」と思ってしまう外観だった。(結果的には会場には満足し、来場の方々の評判も良かったのだが) それに荷物の搬入口もないので正面玄関か地下の駐車場から搬入するしかなかった。

ゲネプロまで1週間となったころ、子供たちの様子がいっそう変わってきた。だんだん「ヤバイ」と思い始めたのだ。(そうではないかもしれないが親から見るとそう見えたのだ)

どこに行くにも台本を持ち歩き、大衆浴場でもブツブツセリフを口ずさむ。ただ一人何の気なしだったのが、担任の横山先生。「子供達、大丈夫ですか?もう直ぐですよ?」と尋ねても「大丈夫です。私は全く心配していません。」と返ってくる。親心子知らずというが、この時ばかりは親心担任知らずとってしまった。

そして、ゲネプロ当日。親も子供も否が応でも気合が入る。大丈夫だと言った先生の言葉を信じて。舞台準備、照明のセッティングを済ませ、いよいよ通し練習。ちなみに、これが初の通しでの練習になる。親たちいや私は、自分の仕事があるもの様子が気になってしょうがないのでゲネプロを観ることにした。

やはり、皆、それなりに緊張しているのかセリフが飛ぶ、止

まる、動きが小さい。特にランスロットは何を言っているのかよく分からない場面もあった。でも、ここからが横山クラス。誰に言われるでもなく、お互いにフォローを入れる。アドリブも飛び出す。飛んでしまったセリフは無かったものにし次につなげる。ヤバイ泣きそうだ。8年間一緒に過ごしてきていて、全員が我が子のように思えてくる。特にジェシカのフォローはナイスだった。しかし、劇としては不安が残る。本番まで1週間しかないのだ。ここでも、心配していないのは担任だけ。「残りの1週間で化けますから。長井クラスもそうでした。」もはや、信じるしかないのである。

そして、待ちに待った公演当日。心配していた雨や雪も降らず、搬入や舞台準備も整った。この日は学園の関係者がメインのお客様になっている。

子供たちは開演前に軽く練習をして、幕が開けるのを待つ。練習風景を見ていると子供たち誰もが緊張しているように見えない。あわててもいい。むしろ開演を待ち望んでいるかのようだ。一方、大人たちはというと、初日のお客様案内係は坊主と髭のお父さん2人。これから来場される方々を案内するわけだが、逃げられやしないかと心配になる。お母さんたちはメイク・衣装合わせに躍起になっている。バタバタしていたのは大人だけだった。

さあ、いよいよ開演の時間。劇が進行していく。正直驚いた。1週間前までの不安がすべて吹き飛んだのだ。発声はよくなり、ゲネプロのときには動きが少なかった部分も修正され、みんな、動きが付いてきている。何人かはセリフを間違えていたが、普通にしている限りは気が付かないだろう。普段はボンボンとしか喋らないシャイロックのなんと声の通ることか。自信ありげに演じる姿がとても誇らしかった。

終わってみれば拍手の嵐。初日の公演は盛況なまま幕を迎えた。

公演2日目の最終日。子供達はまたバージョンアップしていた。「初日より良いものに！」と思っていたのだろう。特に女性陣の演技が変わった。ポーシャ、ネッリサの振る舞いも良くなり、より喜劇として観られたのではまいだろうか。

現状に満足せずに、たった1日であっても良い方向に、自分たちが納得できる事を実行していく。自分たちで考えて実行出来る力が備わってきたと心から実感できる内容だった。2日目は学園関係者以外の方がメインの会場。

来場された方々からも、子供たちの成長を絶賛するコメントを多数頂きました。

普段はなかなか会うことのない方々をお呼びすることが出来たこと、子供たちなしでは実現出来なかったのではないのでしょうか。結果として彼らがリブ役として引き合わせてくれているのです。そういったことを考えると、子供たちの素晴らしさを感じずにはいられません。

8年間、いろいろなことがありましたが、子供たちが良き仲間と出会えたことに感謝するばかりです。そしてなんととっても横山先生への感謝は尽きることがありません。ここまで導いて頂いたことに感謝するとともに、周りで支えてくださったお母様方。本当に有難う御座いました。

これから、子供たちは今後の進路によって、それぞれが旅立って行きます。でも、これまでの繋がりを忘れることなく、お互いに切磋琢磨して進んでいってくれるのではまいかと実感出来る体験でした。

これからの子供たちの未来を期待しながら、これからも見守って行きたいと思います。関係者の皆様においては多大なご協力を頂き心から感謝しております。

(8年生保護者 塩谷浩志)

## 修了の会



## 卒業を祝う会

